沖津嶋日記

全

菅雄本

種麿

寛政むとせといふとしの弥生の九日宗像郡の瀛津島に詣人
よみける歌とし いまこの物に書つく 此しまは西の山と海中に立て
まそ新羅辺に近く諸人もしあまは常に諸人を遣して守らせ
奉る此しまをうしはきまつる大神は宗像三はしらの女神のうち
一柱の大神にておはしまし神御稜威いとかしこく海をは旅立人のまもり
つかさとせさせ給ひて舟路をもをさめひかさせるちかひをもちたまへりし
きのはかなくも人のはかなかりにて島の社に神つかふる
まうけて旅人どもたむけ手向せしとき沖津のあたりの海辺より

九曜文庫

駿州 上 益田蔵書 瑞

取のりは古宮に何も也あらん人に遊来おのかまへる打那ものこしさ
あるは此人てせちにこの比花しきさ報く行て侍るこそりこぬき
且むきそのこ川をさらん言しくに絡りく沖んといふ事
沖津彼方より立と女出きす川を君しわしは堂さまる紀也
見し外東路の方わくく声さるは君かわきまる外風としもなし
まみちまてぬよ舟漕出る空いみしくの防人皆ぞ東のふよ空を見く
と酒湖（カホキウミ）をまうりて つつ之華しき田思ひ出るまてあまれし社今かり
そあれ梳るまきる所とい先も縦しまりけり此舟出する入海をゆすり
世まこうたち松舟しるきさこと緑あれは出堂の筆はあり平て立きする

打昇侯
風土記

前のなきくきたまと云ひ海りしまし今年もまた絵て守りしもきつ
れいは瞬目つらしくおもえまをすに入ゆりしあかしく前こもむかしま
中にてきて打昇侯のありし方かしこ東語らくこ外草木も靄こます
過のまぶや古紀海はい釜を清くなる古衆乃古母の持領中引さくなん
やうまて何遊之里もう空つきまたるに行らく古来れきく打なりさる
北も目をしたるしるり秋笠の内むは外出来てつく海の中道たえ
よみあひしも此とこ縁まや今はなるの古母とあんよみあり長
のし方近くあかしなまい
足姫神のみをゆめでましの河をよそでむかし浦遊つきち野

志賀の神 古事紀ニ 書紀万葉 延喜式 和名ニ見ゆ

とふく浦なみに西風の白波立は出すてふとて時に松のもとよりは
浦の出島のひとつ出たる所なるをしかとまふすに阿曇連等か斎く
底津少童中津少童表津少童の三柱の皇神まします所は
里の上なる御社に底津少童命と申して餘の二柱を相殿とす
浦の外一里ばかりに勝間といふ浦に社二つありて中津少童表津少童
を祭れる大神たちなりといはく阿曇連の裔(ハツエ)は栄西浦あたりにつきて住(ホウシ)となれるよしそのかみは浦にまつりける今社の側なる古碑なるはこの浦の建てる
ところにて今はいかにして御社につくるなる此神社の御前に阿曇氏と称(イフ)
これかれの神職の所まつり東の浦つたひに見えて香椎潟の

浦手は見えさきはなれたる松もなし 志賀の浦波よせくる小舟
か浦くつきいさりす
志賀の海人の小船つなぎて芝浦の玉藻かりなん

也良崎 万葉

也良の崎も過ぎぬれど寒けかる韓亭(カラトマリ)をいつこそといつとなん
あてなきしるし

韓亭 万葉 和名
残浦 万葉

未だ夜さ立かへりにとまり残の浦波見てましものを
浦の西北の方に残良浦とて浦の北にあたる所に出たる里人
の見える
神まつる所にて海貝拾ひてけり 神ハ出ると毎

九九のはまにおきも見ゆる船人進みてしどろに潮満退て
かゝりてなきのうらに浮ひ波しかり渚もかくやまで見てこそおもへ
鹿路かなの山も程をくる言葉にむかふ宗像郡の大海ともおもふ
阿閇伊日本紀無題詩集
波こゝろのうちして糟屋郡なる阿閇しまとあるさへみえ路の浦
辛きのめ里にて卒て行く人とも祝ひ山のぼりて福岡の
方を見わたすこともなし
わりつきも姿を見る浪の立まふかしや辺の方あり
しまれ後(ウシロ)の岸波の打寄るところに大なる岩窟(イハヤ)ありとなむとかり
月光の懸道(カケチ)をてらしつゝ窟の奥ふかくも極のいとむつかし

波打寄る陰に沖の岩崖に船あまた漕きて浮くれく里
近よ磯に網引く船を押出して見ゆる沖の方なる海辺とも船の
上に立てありて颯(タヒ)ふし鷁(テフ)邊の名あるあごの幸(サチ)祈りとのこと
見りもろ舟は引く波の中にて見ゆりて金を惜まるがこし
二又ある村の網の高くてれるをさしく引よせあまて二つの川
毎年内より取入るゝ人々かしこて大なる首ふうしくなとして出す
此しまの名書紀の息長足姫命の御世に吾光とあるされたるを
中世藍(アヰノ)島といひて無題詩集にも其の浦のなるに此と〻ろ
火々出見尊豊玉姫命の御社あり

皈るにはもえつきしにてあへぎこえし浜の東なる海中にあるけしき
岩も有りんとみえて蝶をこそなどの形したる巌ありけり
あしはなれたる洞ありて東より西にと浮かりたる洞の内には海
も入ぬ過し　いとあやしきことぞ絵お州
塩竈しは濱にも見ゆれ長坂浦はなりて渡りたちこなたのうか
ちるま巌あり川この子ぬの虎を行しくもこなくあせり
をいで浮いでひもとつて細螺子此家なりける川に薬無て神さひ
たてまつりけりこれ神の宮こそ鏡あらん庵の上にあらんとてそこ
おかん御門もありん宮はおりて渡しおまてんとしつつこそあまたに候

かくこ寺とりても見えむとこれの名をとす
あなた
塩屋かもしまれくかくえむあへの浦野にて黒ぞす吉波乃如
路のさ海しくる大なる名れ溜するに浮居く魚をくふ見ゆるぬきる
気けし那人なるふたんとゝふ寄せとこう根本のむくつげなるある
数つくるしくられ南海の鰯寺との道とのてる人多ゆかぬ
まうふいなもくもてさぬるとひのひうきしもさとてとくふ
さらく其もしかくまてとふてて紫の海のから瑞の伏なとしさる
を姫島まで相あさい唐船を喰もちむこづひて遥ふ寄やりけむを

名児山
方角

いやましにまさる人〃かなしみて居り 名児山掛借りてこそ見ゆく
こゝろにもあるたくふまゝになみだして 大膳に思ひ出しは風も吹出ぬ
船乃碑を見つゝしく

風まもりまたなかぬつゝかをぞゆかしきかれつる 古徳ハ川も

天の川ある
宗像野

大しほ宗像の神 一もしらず待しまんにや申すならはしけるく
御社乃かたそうふ小川のまゝ天乃川といふ天の安名井よりながる
名たかき 一夜もりまつや名取る川のかの宮と川を過ぎてしたる
まかりとこにありそれのつまに孫もちもの社にこもるといふ
中比の素足さまて上はこなたの蓮を御嶽と云 天照大神の宮あり

田島の沖津しまへ渡る人こそ稀なれ海に入て身
そきは柿浦はつしま宮神の在す所なりけるや人をそ
物いみしてきよくはきりかへて いみきよき身まゐりてこそ
むかしよりいまに女は只このしまへは別条とてつくりて入らく
あしの家に入る事なし 宗像よりつきては於津宮にまうてはべ
ども此浦人はつとめてかたをかけて待はへりし 古今
船も田しまへもさしこめてもこなるときは人はもやしはし
立て物あたんとすれはたちのほるのあはれなり舟をかへし
詔をひきて子孫はかりて古への風儀のこれるものゝ かくのことし

山麻岬 仲哀紀 平家物語
竈門山ハ 神名式 万葉 読本朝文粋
宵振山ハ 元亨釈書
平戸ハ古 植嘉嶋 日本紀 万葉 三代実録等

もしも神柄なりそやきみは御ゆきまほのほりてをちこちと見
わたせば東は長門の海をへだてゝ北は嶮なる山麻乃岬
南には興ある表の山伊勢の御室なる竈門山さる郡なる宵
振乃峰は怡土郡乃雷嶽 西は肩には那珂郡の姫島紀氏の表
浦郡なる姿の崎田川郡の平戸の壱岐嶋はれなきをその
しま龍の國みは対するみち沖の島をいはとそと見ゆるにしみ
北の方みはすべて流れもみえて西は隠岐目にもみえましそへてかくして
波風ひまなく見えわたりはるかに東の方に嶽二ツあるこの
御面より見ゆる笛さしむしらんかぞし おのつりつましの國は

御旅より上つかたは昔人伴清らかなりいのちに一たびは御ゆきまほりてし
おなじおもひてはるかに神をしのびなにかにかくおもへしとは思ひのほかにもしれ
いそぎ船をしつくして嶋のうちを浦々にまはりて
いふしのも見むと思ひしもれにしものをきそのうちに御たびの名もしるよ
中津みよまでありて海の気安らく平けく船御へ天上とめさせなりて
神しくもかしこくも浮ぶものも三宝の中の大事やうに祭らむとふかくは
御旅のみ見ゆるよと紀一

天の川御書かきて剱刀を顕はしの神の名たちも浮め
家像にのりて社殿の中に澤かゝり顕も最上神乃むかしは

三日　相同じ如く沖津島の神つよき河野なりしかは半来つれと
いひおこせしかは舟つなきて待つ思ひ出れと日数をへても心もとなき
四日　風波やます歎くもあまたあり又けふの舟人もひよりをまつへき
のとかならぬ波の高う見えてよみける

　様なき私を思ふてもかなしけれは吹風そよ

とうりゆきける
五日　波風静かなれは船出せむとて楫とりさはく船路なり　あすは進まん
けふよりあなたはいかて漕ゆかむと人々かたらひて海をなかめつゝある
はかなくしく物かたりに過ぐる人はあはれなれは筆にしるして日をおくりけり

の浮島行くに破出て同し所にとまる沖つ島は遥かにまゐりける

　つぬさす岩根のいそに浴ひつゝ柯桟たてる沖つ

あすは晴へく晴よりて沖津路見ゆ
六日　けふも船出さす
七日　同しところにありて泊りをなかめつゝ浮しつむ様を見る
八日　進まれて漕出しけるかな舟出せむかきりとや思ひつゝや
思ふ土佐へ来てかへしはるかに海の路まて

　来てみれは文字の吹風と波よりはむかしにさかへし心やすからん

とくありしも思ひ出されけり

九日風波もおさまりぬれハとて神つりさかりけりてトよりふりの浜と
さして出し　空も風のおともかはりあらん思ひ侍りしこのまハ何も滑る
思ハ神まいりのおまもりの　大嶋より沖つ方はるか海中四十八里
ほどの中にも小嶋一つもなく西は南に大洋中
有るまハ舟をまくべき様あるし　扨て風波のうねりをみて海上のことをトふ
ときト船を出す時と海の真中船を出す時と三つ川をトふに出る時と真中とを
わけとくるしうと思ひ侍りとまうすにハ船を　いさまさひ立せてまても舟
出す出中まことにもおほゆべき船出をまうし舟出す出
尓舟出さんとて漕出さる　神の御ぼ例の有る仕奉るとて漕出す　神になりてうかゝふ時に向
ほとそ　大嶋の海上沖つ方と大鳴　との海の真中を神になりといふ
蒼海原神のこゝろにぬれさせまさめてく鳴とこゝひのむ出は
たり居りと見あかし雲を両岸雲のまかり出て漕出し七つの舟ハ木の葉の

ち給へん事もちかし　浪の立さまハあらまし大海の中にこそ
人こゝろ安くして　かしこき舟人にまかせてものともえいはず
船子と舟ハ神の御心にかなひまつる人ならで何も争ふ所
久しともかたき三川のまゝ海をまかせて　かのたん事をせんとなり近からく
ましくおそろしきハ足もとの岸さへ　他国（アダシ）に漂ふなるへし
天皇の若しくは国内と舟わもはゝ又あり
白波の八重をかきわけて舟ぞゆく　かの神にも沖つしま舟
機よおりたて海の平らかにこの里しばらくかなく波こゝにあへて神つ
さハ縣崖（カケ）の下なる機にいたりしく思ふ舟の

十一日荒礒人例のごとく毎志をへて船出す家に文をつく神つき
のぼりは防人にすむ家に近づけは物忌の頭は無しに従ひて
はしらは　此嶋にまつる例毎月海瀬にまうでして奉る又七月九月十七日に正三位社志摩の神をまつる日なり
八月に大神の宮にまゐる海釣のと注して正三位社にまゐるをいふにも
絹るともし　大神のみあはなるとこそ申にまゐるをなし　神威を懼れてなり
神つきの詞によりて神代の書をよむ都の里又上代の学ひあるを
も語りなさんと申すとて杉もひ来しこれは祈の言よしふとて曳
後國風土記と延喜式の大後紀考とを写してまゐる
十五日は物忌のはなとりよ思ふ常に此も如何におきなく
楮津よ母の浮もとゆかり主殿よ新さ紀ゆりいはみえきまする

神つきは南の例の事につきなんとて　昔七十月に古歳此参り海里神と大師より流海す
参る日は定まるなし　海の海人ともを率て沖に出て魚つりは幸を
まつる日は月ごとにまつりは
ふみえぬ神の御心やなき給ひぬなといひあへり日を定めんとする
こころばをもちたるものこそさあまり此を二つ詞あり神つき
のよ給ことひいなんとする
十六日大神は宮に参るとて川　正三位の社にぬかつく　岩淀のさし
出たるところに御社あり　是荒船社　境にも社あり　岩崎の下り
御手洗岩へよまる波のおりふしの海に舟の形したる岩
二つあり荒船岩といふ　あら船の神とは風の神をいふなるべし　といへり

正三位社より坤の方に当り行ほど日数月も見えず茂まて

本立茂りて峯の半に一の嶽あり其下に大なる巌の根の上に見えし如く三つ

そびえ立てるは高くおそろしきほど神さびて心すみて堪がたし トコロ

神殿拝所
末社十五

巌側にあり祈る所あまたか塚ありと云ひ伝へて其のほとりに何某と申

又側に穴ありて宝殿といふ

懸麻久母畏久言麻久母綾尓忌々志伎瀛津宮尓鎮坐須田心姫命

湍津姫命市杵嶋姫命登御名波申天稱辞竟奉留三柱乃

皇神等乃大前尓畏美畏美毛申須種麿皇朝乃上都大御

代乃大御手風乎痛久慕奉利古支御史等乎璞乃年月

重祢雑讀考従来浅伎心尓波真白玉潜得留事志難久

足曳乃山乃麓山乃浅伎智利尓波蔭豆羅可取得支手著年奈

無在支可畏皇大神波御稜威逸早久世人乎幸閉給比

守給比車満潮乃弥益尓御坐波種麿祈申願申事乎

神在随安久平久所聞食真種可美鏡押羽夫留事乃

如久上都大御代乃大御事等百隈毛不落明良尓審良尓教

給比令悟給比文僕我親族産子乃八十綿連毛常盤石尓堅

磐尓伊賀志夜久波叡乃如久立榮志米給信登小鹿如膝折

伏宇事物頸根衝抜豆恐美恐美毛申

神山の内ゆと殊く香りしくめて清くしく彼神垣にて榊葉のもとと

賀りしことゝふくるゝかゝるをりふしなとそ思ひ給ひけめなり給ひて
神主乃齋宮のみて島すぎし人とも思ひて黒坂のきりしまとなり
あかりのほとりより玉栖人参りてそ献をもちてゆかなふ
大臣おのれまつ家に参りし橘樹をもてまゐりしに御前に栽うよて
そくゝ角くすす奇

霜おけとやとこハなる常世もの　此橘樹ほつ枝に白ふきて
中つ枝は枝に青ふきて下枝を緑くふふこし由ありかりしにや
神の御前に納しうゐてのくまつくハ此堂の薬おこしまう
この如こ熊の實乃賀りしなど萬代にささえ之をゆかむ宮御の

御覧あ給りてちとひかけ

反歌

時しくもかくの木乃實に奉り是くまもゆえてむそ常しなよ

十九日小庭湾にあかる此嶋ハ沖つしまの東南九丁ほかりまるにほりたり
ちまえうまゝて巌のうましてかもれく山乃はに草おしさそうま
岸にいかけ作之蛎石花多し海は巌の岩に浪の打入る雪のごとし
御らふまつなと狗らんとて岸ふのがそて狗垂しに大魚おりぬる
ふてかくれむこ縫を見てく浮沈むそ大ヰ來てこし船よひとしく人く
おどろく其浪にかまつくのふうひたり海士と無ハ逢ひりてんなこと

嶮巌削成
三峰相連
接島中阜
木扶疎

のぼりあひ鋒のごとく岩ほそびえ立て波風は大海をさへぎりし沖の方に
出なくしこれは鮫(サメ)魚のむらがれる沖津嶋をみ給ひて
むかしより岩根神さびたる宮居のところはいともかしこきに雲霧たなびく
此嶋の東南北の方海の中に御門柱(ミカドバシラ)とて七丈ばかりの巌柱のごとくたち
のぼりて二つ並立て沖津しまにむかひたるを天の股柱といふ両巌の間
十丈ばかりもやあらんと見ゆる所海の底深し
あまたび大海の底より立あがり御門の岩をこゆるときは
其日御社にまゐりて
天地の始め時に天照日女命味瀬乃はやまかしこき神徳ましまし

語りく三柱の姫大神はまさしく道の主貴にいますとて御孫
命のつかれ木の節継くまもらしめ天津日嗣を守りたまひたて
ひまつると宣はせしより語り継きて今も御宝乃まつる天雲
と八坂瓊を筑紫に奉り請門の山にあまくだりましまして
お江の荒(アラ)魂き美玉を沖津しま此大宮にいはひまつりしといはひ
まつりし八坂瓊の緒を中津宮のしるしにのこし八咫鏡をまつりし
なりて辺津宮の神の御形とのたまひ松の木まつりしたまひ
三女神を以て福岡郡の三所にまつりしと三ところの神の
ころさへまつりいはひまつりたまへ　身の形にやと

御名をおほせり

友斎

美麗とおもへる御白比宮に語りし所は皇太神
御膳のめくりあるところに金多くあり此は流れ出ぬれは枕乃大きさな
るも流れ出は器乃かたちなる所に切金なとのことき物のことくなるも
いくつも出るを流れて陶に水晶形なるもの竹に剣其外名物
集きかたちの出るもあり或るはこれは中は銀のことし中に石の形と
其他のあまりの光は土中に金のこゝちあり或は其時なんとはしは
日比さしかはる時なとみえて光りありてきらめくし其岸は水の

たゝる所あり土さけて黒く是かゝりしねにて植ることはしもかりて此家を
蒔ては陶あるは佛の像のことき物掘て時により人いろいろ庭に近き
老人の申すには其ゑに奥深く掘りては其石井むすひの
目からくこの花さく岩なる飲はしめし
是井の庭さへて汲ます上かは岩まちて此のごとし
汲戸辺の水を是は雑人の来るふきに亡くなりは
諸人は聞きて神と信ずる人のことく朝夕に御前に露する木の葉を
ちらひ石と見る神としてつゝみ川の神山の内に入ては其
ことなりて若き人其外神ののそい語りしとい

浜くり

玉津島神とつくふと防人ハ此もさくてまかせも満ちて円
とつしまうらにして船毎に岬山をのぼりくだりし
六月朔日の未の刻人ニ言れ社に参りて枯葉をすつと人の言ひしを見ハ
高く了の給あをかきて岬山へ上り行つき海ち志こほとくきぬ
給ひ西北の方封つるをもしのぎて大なる窟あり二ツ十丈あまり深さも同
しほとなる一ノ瀬満れハ窟の内に流れ入るそこにあそびしるけ
かくて待ちれ故に紙ハ
岩屋に来る郷に得て又す給ほどもれて来るとも驚

雪扇とふ言を読給へくとて
扶桑勝陰いはのかけちハかしこけと吾ハかゝる人百代まてに
神山上のぼる山路にて
神山の本の松れをへて白鷺の窓の如くしてほし給けらし
木の間暗き程志てみお深しく吾行道に誰ゆかる
敬山の東の冬に来て見る角しませんくれかと
林の中の蘇ひてさくる客の花さく見あり給ほととぎすの声
六月朔日西北の海を見つゝしく
新羅四ハ夕立ましし百船の津島の峰に雲居立来も

けさ方六ツ過より大なる魚の頭とも海より浮出てあそふ
ほとなきの事ニ海あれ白波ほとばしり防人のゆくを此南の方へ
雛岩とて有り岩の根際ニ生出てあまた磯ニ近き岩の
ほとりニ多き岩あり是岩屋下の間あり中ニ波の打入て引寄
雛を探すニ似たり故雛岩といふ立所ニてみれは打よせて
防人ニよせ候へし母岩ともいへと後ニ寄りて貝殻等なり
此岩辺の打寄る所ニゆらめきてしかも人をあやしみて其大サ
を見るニ三丈余も有る人横二丈余尺ニ成り
余ニ有る小屋しまは波の打寄るを見て作りし也

此岩島高サ七丈ハカリ

またよりて波の打寄といふ程にて澒洞一面になりてもしあれ
時ハ海水底ニ沈みて其海ひきくなるといへり是れハ忽ち
岸の際より激しく流れて白波しきりに満ち
目も当られぬ様なる中ニ打寄せ防人の家も波に
ゆられぬ程にて漁具なとを携へて高き小屋の陰に
いりて太き家ともしのび防人のすまゐの住み
後ニ別ニ小屋を作りてありし家を移し
暁ニ至て波も静まりけり

寛政十二年初秋三日青木達房ぬしのもとめにより
うつしをへぬ